



富岡製糸場総合研究センターだより

No. 24

(2023年2月発行)

富岡製糸場をもっと楽しむための豆知識をお届けします！

てわざ 工女の手技

富岡製糸場では操業開始から停止時まで、115年間にわたり優等糸の生産が行われてきました。フランスから取り寄せられた繰糸器械は改良し、昭和初期まで使われていたようです。当時の生糸づくりは、工女の技量の良し悪しで品質が大きく左右されました。工場側が工女に、どのような手技を求めたのか、大正期につくられた歌の中に見ることができます。

歌詞の内容は、繭糸の引き出し方は優しく、繰糸のためのお湯の澄み具合や適温の維持、繭は一粒ずつつける、繭糸を指に巻きつけてから糸を接ぐこと、糸のまとまりを良くするために撚りかけをすること、糸むらを生じさせないように糸を繰ることが、歌われています。

現在、繰糸所内では、フランス式繰糸器の復元機で繰糸の実演を実施しています。

繰糸の歌

北原白秋 作詞
弘田竜太郎 作曲

箒しづかに索緒しやんせ 繭は柔肌絹一重
 わたしやお十七花なら蕾 手荒なさるなまだ未通女
 いつもほどよい繰糸湯の繭よ すまずにござらずつやつやと
 惚れりやほどよく熱いはさめる 焼かず離れずさらさらと
 ひとつひとつつけたせ繭は 慾にからめば度外繰
 一人や一人に情増せ恋は 両方立てれば義理立たず
 截附しやんすな繰切らしやるな 巻けば巻きつく繭の糸
 よりによりかけからんだ繰よ おまへ切れてもわしゃ切れね
 いとし小梓へ巻きとる繰は それは黄の絲白の繰
 おしれむら繰むらなくきよく いつもむら氣じゃ身がもてぬ

バックナンバー
はこちらから▼



◆ 発行 ◆

富岡市世界遺産観光部 富岡製糸場総合研究センター